

## 曖昧さの海を脱して

附属図書館長 柴田正良

正確に名づけよう それは  
いっぼんの笞を走る  
ひとすじの火だ  
正確に名づけよう それは  
ひとすじの火が打つ  
いちまいの頬だ

(石原吉郎「定義」から)

### ○ 隠れ家としての図書館

新入生のみなさん、入学おめでとうございませう。このたび新たに附属図書館長に就任することになり、改めて図書館のことを考えてみたのですが、ここしばらく自分がすっかり図書館から遠ざかっているのに気がついて愕然としました。ある意味で、私も正直に「新米です」と言わなければなりません。ですから、新入生のみなさんにわが大学の図書館を詳しく紹介するというよりも、みなさんが今経験しつつある時間と絡めて図書館という存在を少し考えてみたいと思います。

まず、個人的な経験をお話するのを許して下さい。私が図書館をもっとも身近に感じたのは小学生のある時期、しかもそれは図書館というよりごんまりとした図書室でした。なぜかその頃、近所の遊び友だちから疎まれてしまった私は、他に行き場もなく、放課後になるとその図書室で本を開いて独りの時間をやり過ごしていました。そのときの図書室の湿った空気や少しカビくさい本の匂い、ストーブの暖かさや北側の窓から入る弱々しい光を、今もよく憶えています。それは、なによりも私にとって、心の安らぎを与えてくれる隠れ家でした。私はその中にぬくぬくとくるまれ、それでようやく自分の存在は保たれていたような気がします。

そんな子供の時期がみなさんにあったにしろなかったにしろ、今やみなさんは、小学生時代の経験を遠い出来事として思い出すほどに成長

したはずです。たぶん、みなさんは今、そのときの私のような孤独な存在ではないでしょう。でも、図書館というものの根底には、それぞれの人にとっての隠れ家という意味があってしかるべきではないでしょうか。その人にとっての理屈ぬきの安らぎの場所。

### ○ 知的アリーナとしての図書館

### ○ 世界への通路としての図書館

さて、みなさんの多くはこれから、大学生活を通して初めて、「受験生」や「学生」といった共通性でくられる集団的存在から、他者との差異性によって認識される個人的存在にならなければなりません。それは、他者と区別をつけなくてよいがゆえに曖昧なままであった様々な事柄の一つ一つにはっきりと白黒をつけ、あれとこれを選択と捨象の秤にかけ、＜私＞という存在を自分に刻み込んでいくプロセスです。他者と違うことは、時にはひどく苦しいことであり、また悲しいことでもあります。しかし、あなたが正確にぴったりと＜あなた＞になるためには、あなたの考えが正確にあなたのものになければなりません。冒頭に引いた詩のイメージを、私はそのようなものとして理解しています。それは、言いかえると、借り物でないあなた自身の言葉を求めての、これから始まるみなさんの厳しい知的闘いなのです。

そうした闘いにとって、図書館はなんと多くの助けをみなさんに用意していることでしょうか。どんなに奇妙に思える発想も、どんなに風変わりな考えも、古今東西の多くの先人たちが何かしらそれに関する手がかりを残しているものです。先人たちの知恵は、みなさんの生まれだての着想を鼓舞し、みなさんの不安を鎮めてくれたりしますが、あるときはみなさんの誤りを手厳しく指摘したりするでしょう。「お若い、こんな話を知ってるか？」と語りかける先

人たちのたくさんの顔が見えるようです。

金沢大学附属図書館は蔵書数、およそ176万冊、中央図書館の他に、医学系分館（含保健学類図書室）、それに平成17年4月にサービスを開始したばかりの自然科学系図書館を擁し、さらに中央図書館内に設置されている金沢大学資料館と展示協力等、密接な連携を保っています。しかし、図書館の機能はいまや、その図書館がどれほど大きな規模であるかということのみによっては測れません。図書館はオンラインで他の図書館と情報を交換しているばかりでなく、その図書館にない書物や雑誌記事・論文などを国内外の図書館から借り出したり、コピーを取り寄せることもしてくれます。

ここで、みなさんにとっての図書館のもう一つの存在意義を強く訴えておきたいと思います。それは、図書館には文字以外の媒体、例えばビデオやDVDによる世界の情報が数多く収集されていることです。私自身も、留学の準備のために、語学の資料だけでなく、日本や外国の文化習慣に関する視聴覚情報を利用させてもらったことがあります。しかし、十分には利用しきれず、留学先の大学では、日本文化のなんたるかを具体的に説明できずに情けない思いをしたものです。他者との違いを知ることこそすなわち自分が何であるかを知ることだ、という真理は、個人だけでなく国や民族のレベルでも同じです。このとき、自他において曖昧であることは、互いに致命的な誤解さえ生じさせる危険があります。

### ○ 人類のアイデンティティとしての図書館

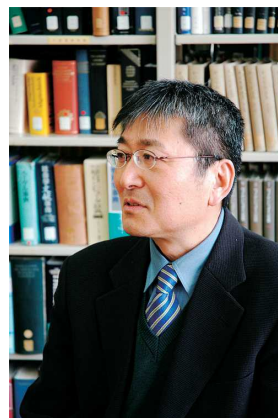
もしみなさんが知的なエイリアンで、初めて地球に飛来し、その表面上を徘徊している「人類」という生物が何者であり、どこから来て、どこへ行こうとしているのかを知りたいと思ったら、どこをこっそりと観察するのでしょうか？ オフィスでも、農園でもいいし、巨大遊園地でも、飲み屋でもいい。サッカー場でも、国会議事堂でもいいかもしれません。しかし、そのあげく、この人類という存在はどうにも不合理で、わけの分からぬ矛盾だらけの生き物だという結論が出たら、きっとみなさんのうちの一人は、

こう言ってくれるでしょう。「〈図書館〉というのを調べてみたらどうか。そこは何か人類にとって特別に重要な場所であるようだ。」そして、そこでみなさんは必ずや、未来にかけてまだ見込みのある存在としての人類を発見することでしょう。

140億年前のビッグバンから始まる宇宙の歴史では、恐らく、人類の営みは暗黒の中で一瞬のあいだ光を放ち、すぐに暗闇へと没してしまうはかない存在にすぎません。みなさんは、われわれがいずれは滅びて無に帰してしまうことに絶望するのでしょうか。すべては何の意味もない空虚な祈りなのだ、と。しかし、永遠であることが価値なのではありませんまい。人類は、高い倫理性によって、また自由と真理と表現におけるその類い希なる到達によって、この宇宙の奥深くに記憶されるに違いありません。そして、その確かな証こそ、われわれ人類の図書館だと言うべきです。

シベリア抑留の経験をもつ冒頭の詩人は、またこうも謳っています。なによりも、その高みへと歩き始めたみなさんに向けて。（同、「伝説」から）

きみは花のような霧が  
容赦なくかさなりおちて  
ついに一枚の重量となるところから  
あるき出すことができる



柴田 正良

SHIBATA Masayoshi  
2008年4月1日から  
附属図書館長。  
人間社会学域人文学  
類教授、同学類長。  
専門分野は現代哲学。

図書館注)

引用された詩の全文は、「石原吉郎詩集」思潮社1969  
（現代詩文庫 26） 図書館 911.56/G325/26  
でごらんください。